

---

**クリーニング代は海持ちで。**

ラン丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリーニング代は海持ちで。

### 【Nコード】

N2230Q

### 【作者名】

ラン丸

### 【あらすじ】

海を眺めてふと思う。

・・・海よ。私と勝負しろ！

どうでもいい日常を切り抜いたハートフル系短編小説を目指して書きました。

(前書き)

昔、即興で作った駄文です。

今日も雨が降っている。

これで何日目だろうか。授業中だったが私はノート取りを一時中断して、教室の窓越しに見える荒れた太平洋を眺めた

海は綺麗だ。その日その日によって見せる顔を変えてくれるから飽きることはない。

それでもこう何日もお冠だどこっちまでお冠になってしまっよ

私はひとつため息をつくとき、鉛筆を放り出しほほ杖をついて、いつもより顔色の悪い海を眺めた。

雨は嫌いかい。海さんよー。同じ水なんだから仲良くしなよ

心の中でそう皮肉めいた言葉をつぶやいても海は相変わらずだった

こうなったらどっちが先に機嫌を直すか競争してみようか

しかし、彼は変わらず一定のリズムで波打っている

よーし、じゃあはじめ！

「何をニヤニヤしてるんだ細江」

「へー!？」

はっと我に返って辺りを見渡せば先生やみんなが私のほうをじっと見つめていた

どうやら周りがまったく目に入らないほど集中していたらしい。いつからこの状態が続いていたのかと思うと憂鬱になった

「す、すみません」

「まったく……。やる気がないなら帰ってもいいんだぞ？」

先生は不機嫌そうに黒板に向き直り、授業を進める。周りのクラスメートもそれにならう

仕方なく私も再びノートをとる作業へと戻ることにする。鉛筆は普段よりなんだか重く感じた

それからしばらくたって、チャイムがなって、いつものように委員長が挨拶をして、いつものように授業は終わった

「細江、この教材を5階の資料室へ戻しておいてくれ」

先生が自分の荷物を片手に抱えながら、教卓に残された分厚い辞書を数冊指差した

「えー、私これからお昼なんですけど……。」

「今日ボケつとしてた罰だ。いいからこの休み中に戻しておけよ」

そういうと先生はさっさと教室から出て行ってしまった

ちくしょうあの馬鹿教師め

私は取り出しにかけていた水筒を乱暴に自分の机へ置くと、教材の元へ向かった

その辞書はなんだかよくわからない横文字のタイトルで書かれており、読めなかったがとりあえず重たいことだけは理解できた

数冊ある教材を持ち上げるとよろよろしながら教室を出て行く。

廊下ですれ違う生徒たちは、皆危ない足取りの彼女を一度振り返った

教材はとても重たくて何度も取り落としそうになりながらなんとか目的の5階へと到達した

ところが、やっとの思いで階段を上りきったところで自分が資料室の鍵を職員室から取ってくるのを忘れていたのに気づいてしまったのだ

馬鹿は私だった。とその場に力なくへたりこむ。床は雨のせいかひんやり冷たくて少ししけっていた

壁に背中を預けてしばらくぼーっとしてみる。ほかに人影がいなかった分、階段の踊り場で座り込めたのはせめての救いだったかもしれない

そういえば、ここは5階だっけ。じゃあせつかくだし出入り厳禁の屋上でも行ってみようかな

どうせまた元来た道を戻るくらいなら少しくらい楽しい思いをした  
っていいだろう

私はすくと立ち上がり、スカートについたほこりをはたくと教材を  
その場に残し、軽やかな足取りで残りの一階分を上りきった。

非常灯に照らされた鉄扉が目に入る

私はわくわくしながらドアノブに手をかけ、きしむ扉を体全体を使  
うようにして押し開けた

扉が開いていくに従って薄暗い扉の内側に光が差し込んでくる。ゆ  
っくり扉を全開にさせ、外へ躍り出ると

外は・・・

「晴天だ！」

先ほどまでの大雨が嘘のように晴れている。空には真っ白な雲がぼ  
つりぼつりと浮かんでいて、地面には大きな水溜りがいくつかでき  
ていた

生徒の転落防止用に作られたのであろう柵へかけよる。

海は大きく揺らいではいたがそのリズムは穏やかで、色も藍色へと  
変わっている

「あ、虹！」

4階のクラスの生徒だろう。階下からそう声がして私は無意識に少

し視線を上げた

そこには大きな海をまたぐように大きな大きな立派な虹が出ていたのだ

「うひょー！海君、海君やるじゃないか！！」

もろ手を挙げて賞賛できるような、そんな海の大勝利である

下の彼らからも感嘆がざわめきとして聞こえてくる

私は急になんだか愉快になって、その場へ仰向けに倒れこんだ

水溜りで服が汚れてしまうなんてことは考えもしなかった。ただただ青い空に白い雲。そして時折聞こえる小波の音

こんなに愉快なことはない！

私は誰にというわけでもなく無償に楽しくなってしまうって髪や服をぬれるのもいとわず大笑いしたのだった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2230q/>

---

クリーニング代は海持ちで。

2011年1月19日12時55分発行